

西川町と本学の協定に至る経緯と町内での活動について

土居 洋平

Report on the details of the conclusion of the comprehensive agreement between Nishikawa Town and Atomi University and the Students Activities in Nishikawa Town

Yohei DOI

はじめに

2015（平成27）年12月22日、山形県西村山郡西川町と跡見学園女子大学は「学術研究の発展及び施策の充実のため相互協力し、もって人材の育成と地域社会の発展に寄与することを目的」とした連携協定を締結した。また、協定の締結に前後して本学の学生が様々な形で町内の活動に参加するようになっている。本稿においては、何故、東北の山間部の町である西川町と本学が連携に至ったのか、協定を受けて具体的にどのような活動が展開されているのか、そこにどのような教育効果と地域貢献の可能性があるのかについて紹介したい。

1. 西川町の概要および協定に至る経緯

西川町は、山形県中部・西村山地域の西端、月山の麓に位置する町である。1975（昭和50）年には1万人を超えていた人口も2016（平成28）年12月1日現在、5,717人まで減少し、同じく高齢化率も13.6%から40.1%へと増大しており⁽¹⁾、人口減少や高齢化といった課題を抱えた典型的な東北の山間部の過疎町村といえることができる。また、山形県内でも有数の豪雪地帯として知られ、特に町内の大井沢地区や志津地区は、積雪が3メートルから5メートルに達する全国有数の豪雪地帯でもある。かつての主要な産業は鉱業や林業であったが度経済成長期の産業構造の転換によりどちらも衰退し、現在はサービス産業等への移行が進んでいる。特に、近年は月山の麓という立地を活かした観光振興に力が入られており、「志津雪旅籠の灯り」「月山マルシェ」などの新しい観光イベントが生まれている。また、町内大井沢地区は地域づくり活動が積極的なことで知られ、全国から移住者が数多く集まる地域としても知られている⁽²⁾。つまり、地方の観光とコミュニティを考える際、典型的な課題を抱えているとともに、既にそれを克服すべく様々な取組みが先進的に行われている地域でもあり、本学の教育のフィールドとして大きな可能性を有した場所であるともいえるのだ。

この西川町は、筆者が前任校在職時、調査や実習、ゼミの地域活動で関わってきた地域でもある⁽³⁾。また、本学に移籍したのちも関係は継続し、町内大井沢地区の地域活動には継続的に参加しているほか、同地区で昭和初期～中期に活躍した女医「志田周子」を題材にした映画の制作や、旧大井沢小学校に設置予定の「西川町里山文化研究所」の設立等に協力をし続けている。

また、協定締結以前の段階から、町内の地域づくりや観光振興に関わる活動に本学観光コミュニティ学部学生が参加してきた。これは、有志ボランティアの募集という形で学部学生に周知したのであるが、「大井沢ふるさと保全活動」（7月、地域の除草・交流のイベント）や「月山マルシェ」（8月、高原の公園での直売等のイベント）、「大井沢秋祭り」（10月）の活動に学生が参加するに至っている。

このような関係性も踏まえ、本学観光コミュニティ学部にとっては大きな可能性を有した教育のフィールドとして、また、西川町にとっては観光振興や地域振興において専門的知見や外部の若者の考えを獲得する更なる機会として、双方が有益なパートナーになり得るという考えから、連携協定が締結されるに至ることになった。

2. 協定の締結

協定の締結式は2015（平成27）年12月22日、西川町役場で行われた。本学からは観光コミュニティ学部長ら教員3名と学生2名が、西川町からは町長・副町長・教育長および関係各課長らが参加した。

締結式の折、町長からは第6次の総合計画のもとで町内16地区が地域づくり計画を策定し、住民主体の地域づくりが進められていることや「観光立町」を目指した様々な事業が行われていること、月山の自然を活かした文化を研究する「里山文化研究所」の設立を構想していることなどが紹介されるとともに、こうした取組みに対して観光とコミュニティを専門とする本学の教員や学生からの協力を大いに期待している旨の話があった。

締結式はマスコミにも公開で行われ、地元紙を含む三社（日本経済新聞、毎日新聞、山形新聞）が参加し、各誌で報道された（図1）。

3. 協定締結後の活動（2015年度）

協定の締結を受けて、2015年度中に二つの町内行事に本学学生が参加している。

(1) 志津雪旅籠の灯り

志津雪旅籠の灯りは、西川町内の豪雪地帯である志津地区で約10年前に始まった観光誘客のイベントである。これは、5メートルの積雪を活かして江戸時代の旅籠街の様子を雪像で再現するというものであり、地元の月山志津温泉旅館組合を中心に関係者が集った「月山志津雪旅籠の灯り実行委員会」が主催している。2015年度は暖冬の影響で積雪が少なかったとはいえ志津地区には4メートル程度の積雪があり、例年どおりの迫力ある雪旅籠が制作された。

イベント自体は2月26日（金）～28日（日）、3月4日（金）～3月6日（日）の2週の週末6日間に行われたものであるが、この雪旅籠の制作が2月23日（火）から26日（金）の4日間にかけて行われ、これに本学17名（及び教員1名）を含む4大学から約70名の学生が参加した。

本学学生17名は、2月22日（月）の午後に山形駅に集合し、西川町役場の送迎バスで志津地区に移動した。参加した学生の多くは暖冬とはいえ4メートルを超える積雪に驚いていた様子であった。バスを下車したのち、地区内を簡単に視察し、3つの温泉ホテル・民宿に分かれて宿泊した。

実際の作業は2月23日（火）から始まった。午前中に参加学生と地元関係者の顔合わせを兼ねた全体説明があり、その後、担当雪像毎の班に分かれての制作の打合せが行われた。本学学生は、地元の東北芸術工科大学の学生と共に2つの雪旅籠、1軒のアイスバーの制作を担当することとなった。打合せの後に、班ごとに担当する旅籠等の確認を行い、制作方法についての講習を受けた。制作は、スコップやスノーダンプ、電気チェーンソーなどを用いて行うもので、本学学生は慣れない手つきで戸惑いつつも、東北芸術工科大学の学生からアドバイスを



図1 協定締結についての新聞記事
（山形新聞、2015（平成27）年12月23日）



図2 完成した雪旅籠（筆者撮影）

受けながら、作業を進めていった。初日の作業は旅籠の大まかな整形、雪洞の掘削作業が中心で、その多くは力作業であったが、時折吹雪く天候のなかでも学生たちは元気に作業を進めていった。作業は夕方までであったが、この日は夕食後に各班で集まり、旅籠等のデザインの確認と作業の打合せが行われた。デザインについては、東北芸術工科大学の学生が主に検討をしたものであったが、実際の整形作業は本学学生と共に行うもので、学生たちは交流を深めながらも真剣に打合せに臨んでいた。

2月24日（水）からは、雪洞の掘削作業も続けつつ、デザインに従った雪像の整形作業も行われるようになった。整形作業は、電気チェーンソーで大まかな形を造った後にスコップ等で細かく仕上げていくもので、仕上げにあたっては、新雪と水を混ぜて生コンクリート状にし、デザインに沿って雪像に塗り上げるといった手法が用いられていた。学生たちは、初めての作業に戸惑いつつも、地元学生から丁寧に指導を受け、数時間程度で慣れていったようであった。

2月25日（木）になると、連日の作業で学生たちにも疲れが見えるようになっていたが、仕上げの細かい作業が中心となったことや、雪像内での作業も増えたため吹雪の影響も受けにくくなったことから、互いに助け合いつつ、何とか作業をこなすことができていた。この日の夕方までに、ほぼ雪像の整形は終了し、作業は当日の細かい装飾を残すのみとなった。夜には、制作の打ち上げも兼ねた懇親会が行われ、大学の垣根を超えた学生同士、そして地元の関係者との交流が図られた。

2月26日（金）は、午前中に装飾品等が搬入され、雪像の最後の仕上げが行われた。アイスバーには県内の企業が生産している有機LEDが設置され、雪洞内が美しくライトアップできるようになった。昼過ぎまでには作業も終了し、夕方には会場内は蠟燭の灯りで幻想的に演出されるようになった。そうして町内外から関係者と観光客が訪れるなか、雪旅籠の灯りの開会式が執り行われ、記念の花火が打ち上げられた。学生たちは、制作の苦勞が実を結んだ様子を見て感激している様子であった。

2月27日（土）以降もイベントは続いたが、本学学生は制作協力のボランティアであったため、この日の午前中に解散ということになった。午前中に解散式が執り行われ、学生たちは地元関係者や他大学の学生との別れを惜しみつつ、町が手配した大型バスで山形駅へと移動していった。

豪雪地帯の山村で過ごした6日間は、学生にとっては刺激的な体験になったようである。また、地元関係者や専門の異なる他大の学生との交流を通じて自らとは異なる視点を学び、そうした視点の異なる者が集まって一つのイベントを創り上げていくことの利点についても学んだようであった。以下に、参加学生のコメントを抜粋して記す。

最初は日数が長いため、雪旅籠を完成させることができるか不安でしたが、いざ挑戦してみると自分の手でもなんとか形にするすることができたので最終日、完成した時はうれしかった。今回のボランティアを通して貴重な意見ができ、自分へ成長に繋がったのでよかった。（1年生）

他大学との交流もあり、新たに友達を作ることができ楽しかった。また、雪旅籠のような、雪で家を作る機会はここでしか体験できないので、このような



図3 雪旅籠制作の様子（筆者撮影）



図4 雪旅籠制作メンバー（筆者撮影）

経験ができて良かった。(1年生)

宿の女将さんはお母さんのように優しく、地方の方の温かさを感じた。またこのイベントは、一過性のものであるため毎年テーマを変えることで参加者を飽きさせない工夫をしてリピーターを得ていることがわかった。そしてこのイベントに対する実行委員会や芸工大の人の思いが強く、最初は寒さに耐えるのに精一杯だった私にも、「良いものを造りたい」という気持ちが伝わってきて頑張って取り組むことができた。(2年生)

(2) 大井沢地域づくりフォーラムへの参加

大井沢地区は、町内の東南端に位置する山間部にあり、南北8キロにわたって10の集落が点在する地域(大字)である。この地域では、町内会の連合組織である大井沢区を中心とした地域づくり活動が盛んであり、例年秋から冬にかけて定期的に、区から委託を受けた「大井沢の未来を描く会」が主催する形で、地域づくりについて考える会が開かれてきた。大井沢地域づくりフォーラムは、その成果を共有し今後の地域づくりの取組みを考えるために開かれてきたもので、2015(平成27)年度は3月6日(日)の午後に旧大井沢小学校開催された。

このフォーラムに、コミュニティデザイン学科の学生が1名(及び教員1名)参加した。フォーラムには、本学のほかに地元の山形大学の学生と教員が参加したほか、地元や町、県の関係者など70名程が参加した。フォーラムでは、山形大学の学生と教員から移住をテーマにした調査の結果が報告されたほか、山形県から大井沢の地域資源の活用について提案がなされた。その後、町からフォーラムの会場である旧大井沢小学校の今後の活用について提案があり、最後に、大井沢をフィールドに博士論文をまとめた研究者から、大井沢の自然教育の可能性についての報告があった。

その後、懇親会が行われ、参加者同士で意見交換をしながら交流が深められた。今回は、本学からは参加にとどまったが、懇親会においては、次年度以降に大井沢をフィールドにした調査等を共同で実施することや、町内でインターンシップを受け入れることなどが話題となった。また、参加学生は、以前から大井沢地区での活動に参加してきたこともあり、地元の関係者との交流をさらに深めていた。

4. 協定締結後の活動(2016(平成28)年度)

2016(平成28)年度に入っても、西川町内の多くの活動に学生が関わっているほか、基礎ゼミナールのインターンシップを町内で実施している。以下に詳細を記す。

(1) ふるさと保全活動への参加と交流(大井沢地区)

大井沢区(大井沢地区の地域組織)は、町の「地域づくり活動補助金」を活用して、2016(平成28)年度に「都市部学生等との協働による大井沢の地域づくり事業」をすることとなった。これは、以下を目的としたものとされている。

都市部に暮らす学生や社会人を大井沢の地域づくりの一員として参画いただくことで、第3次大井沢地域づくり計画に掲げる「仲間づくり」と「仕事づくり」を促進し、持続可能な地域づくりを推進します。また、参加いただく学生等にとっては、日本の山村が抱える人口減少や施設管理等の深刻な地域課題を現場において体感できる学習機会として捉えるとともに、大井沢の人々との交流を通し、共にその解決方法を見出すチャレンジにより、人間形成の一助とすることを目指します。引いては大井沢を外から継続的に支援する人たち《パートナー》の醸



図5 大井沢地域づくりフォーラムの様子(筆者撮影)

成により、外部の地域づくり担い手を確保し、大井沢の地域力を高めるものとします。（「都市部学生等との協働による大井沢の地域づくり事業」計画書より）

この目的に沿った活動に関わる交通費や宿泊費、成果物の作成に関わる費用はこの事業費で負担できることとなり、大井沢「ふるさと保全活動」についても、学生（及び教員）の山形駅以降の交通費及び宿泊費、諸経費はこの事業で賄われることとなった。なお、本学学生（及び教員）も、前日に山形駅に集まって以降は、この事業費を用いて移動し、地区内の民宿に宿泊している。

さて、大井沢「ふるさと保全活動」は、年に一度、大井沢の外からも参加者を募り、地区住民と共に地域の除草等の活動を行うものである。今回は、大井沢地区住民や現地の地域おこし協力隊員に加え、本学学生2名（及び教員1名）、山形大学の学生や教員、学生時代に大井沢に関わったことのある社会人なども参加した。

参加者は、数班のグループにわかれ各々担当地域が割り振られ、担当地域の除草と草運び等を行った。本学学生（及び教員）は、地元住民、山形大学学生とともに大井沢自然博物館が管理するビオトープの除草作業を担当した。学生たちは、時折雨も降るなか交流を深めながら共同で作業にあたった。作業は夕方迄行われ、その後、懇親会が行われた。

本学学生のうち1名は農作業の経験もある学生であり、除草作業のスピードが地元学生よりも格段に速く、懇親会ではそのこと等を話題に、学生同士、学生と地元住民の懇親が深まった。また、地元住民の中には移住者もあり、学生たちはその移住経緯や大井沢での暮らし、新旧住民の地区への思いなどについて理解を深めていた。

(2) 西川町内での基礎ゼミナール学外実習・インターンシップの実施

連携協定に基づき、2016（平成28）年度の基礎ゼミナールの学外実習・インターンシップを西川町内で実施した。今回は、西川町役場に1名、月山志津温泉旅館組合に1名、大井沢区に1名の合計3名が町内で学外実習・インターンシップを行った。

西川町役場でのインターンシップは、7月30日（土）～8月8日（月）にかけて行われた。主な業務は、この期間の8月6日（土）に開催された「月山マルシェ」の運営であり、企画と運営を担う地域おこし協力隊員に付き添う形でのインターンシップの実施となった。当該学生は、前年度から西川町内の活動に複数回参加しており、前年度の「月山マルシェ」も経験していた。また、付き添った地域おこし協力隊員とも面識があり、比較的スムーズに活動に入ることができた。宿泊も地域おこし協力隊員の自宅であり、インターンシップ期間中は24時間協力隊員と行動を共にし、業務後は隊員が協力隊に就任した経緯やライフコースについても話す機会があり、密度の濃い活動となったようである。なお、「月山マルシェ」の運営そのものについては、以下に項目を改めて紹介する。



図6 大井沢ふるさと保全活動の様子（筆者撮影）



図7 西川町内でのインターンシップ実施を伝える記事（山形新聞、2016（平成28）年8月5日）

月山志津温泉旅館組合へのインターンシップは、8月1日（月）～8月10日（水）にかけて行われた。期間中に2軒の旅館・ホテルで活動し、旅館とホテル、学生向けと富裕層向けという特徴の異なる場所での活動となり、業界内の多様性についても理解を深めることができたようである。また、当該学生は、西川町への訪問はこのインターンシップが初めてであったが、土地勘も無く面識のある人もいない環境のなか、温泉地域の旅館業について多くを学び取ったようであった。

大井沢区での学外実習・インターンシップは、9月24日（土）の大井沢敬老会、10月15日（土）～16日（日）の大井沢お～たむふえあ、12月10日（土）～12月11日（日）の大井沢区地域づくり視察（上越市）への参加という形で行われた。また、2月7日（火）に大井沢の未来を描く会に参加という形で行われる予定である。各々の活動については、以下に項目を改めて紹介するが、当該学生は、この学外実習・インターンシップで初めて大井沢を訪れたものの、地区内での活動が認められ、大井沢区からインターンの成果物として地区のPRポスターの制作も依頼されるに至っている。

学科としては学外実習・インターンシップの初年度であったこともあり、半ば手探りでの活動となったが、3名中2名の学生は学外実習・インターンシップ後も西川町との関係を継続し、地方でのコミュニティデザインに実践的に関わりながら理解を深めており、概ね成果のあったものとして捉えることができるであろう。

(3) 月山マルシェへの参加

月山マルシェは、町内の月山に至る高原部・弓張平地区の弓張平公園で行われる、地元特産品を中心とした県内産の農産物の直売、工芸体験などを軸にしたイベントであり、地域おこし協力隊隊員（前任）が発案し、3年前から始まったイベントである。2016（平成28）年度は、8月6日（土）に開催された。運営は、協力隊員のほかに地元の商工会青年部をはじめとした比較的若い世代が中心となった「月山マルシェ実行委員会」が担っている。今回は、西川町役場でこの時期にインターンシップをした本学学生も実行委員として運営に関わったほか、当日の運営ボランティアとして本学学生7名（及び教員1名）が参加している。



図8 月山マルシェで打合せに参加する学生の様子
（筆者撮影）

インターンシップで関わった本学学生は、約1週間前から現地の地域おこし協力隊のもとで準備作業に関わり、看板の制作等の作業に携わった。また、当日はボランティアスタッフの管理などを担当した。その他の学生は前日に山形県内に入り、当日の朝に弓張平公園に集合し、先輩の指導のもと、テント設営や撤去から誘導・案内、会場管理、イベント時の安全管理などに携わった。

学生たちは、こうした地域を主体としたイベントに関わることで、どのような人々がどのような想いでこうしたイベントを実施しているかを学んだようであった。特に、今回の「月山マルシェ」は、地域の振興を目的に近年企画されたイベントであり、地方における地域おこしについて現場で学べる機会となった。

特にインターンシップで関わった学生は、実行委員会に関わり、また、イベントの運営に中心的に関わる地域おこし協力隊隊員と常に行動を共にしていたこともあり、イベントの意義や地域との関係、近い世代の住民やこの地域出身者の地域に対するアイデンティティなどを身近に感じ、大いに刺激を受けたようであった。

(4) 大井沢例大祭への参加

大井沢例大祭は、大井沢湯殿山神社と大井沢区が主催した秋のお祭り行事である。2016（平成28）年度は9月10日（土）に開催され、この行事に本学学生3名（及び教員1名）が参加した。これについても、山形駅以降の交通費や宿泊費等の諸経費について、上述の「都市部学生等との協働による大井沢の地域づくり事業」による補助を受けてい

る。

学生たちは、前日の夕方迄に大井沢に入り、事前の準備として、神輿の組み立て、山車の装飾などの作業に携わった。また、当日は早朝より幟の組み立て等の準備を行った。お祭りは、午前中に神社を出発した神輿が区内の各集落を巡る形ではじまった。神輿巡行から、山形大学の学生も参加し、両大学の学生たちは地元の子どもとともに神輿を担ぎ、集落を巡り歩いた。

昼食後、夕方の行事まで時間があるということで、学生たちは、大井沢区事務局長の志田龍太郎氏から、地区の地域づくりの歴史についての講義を受け、大井沢区で地域づくりが盛んになった経緯、以前に開催していた雪まつりの企画と実施から中止に至る経緯、その後の様々な取組みなどを学んだ。

夕方には、神社で祭礼行事として火渡りの神事が行われた。境内付近には、地区住民主体の出店が並び、地区内外から多くの人々が集まり、祭りを楽しんでいた。学生たちは、出店の準備から販売を手伝ったほか、途中、交替で火渡り神事にも参加した。火渡り神事は、まず、修験者が祝詞を述べたのちに火渡りを行い、その後に願掛けをした人々が火渡りを行うというものであった。学生たちは、普段は経験できない神事を興味深く体験していたようであった。

特に郊外部出身の学生にとっては、地元で同様のお祭りがあるとはいえ、その多くは様式を簡略化されたものであり、伝統的な様式が残る地方の山村部の祭礼行事に関わることは、伝統文化やその地域における意義を知るうえで貴重な機会となった。



図9 例大祭の準備の様子（筆者撮影）



図10 例大祭・神輿巡行の様子（筆者撮影）



図11 例大祭・火渡り神事の様子（筆者撮影）

(5) 大井沢敬老会への参加

大井沢敬老会は、敬老の日にあわせ、大井沢の高齢者に健康についての啓発を行うとともに、食事をしながら交流を行い、高齢者に楽しんでもらおうという行事であり、2016（平成28）年度は、9月24日（日）に大井沢温泉「湯ったり館」で開催された。また、この行事に本学学生3名（及び教員1名）が参加した。なお、この行事についても山形駅以降の諸経費については「都市部学生等との協働による大井沢の地域づくり事業」から補助を受けている。また、学生のうち1名は大井沢区への学外実習・インターンの一環としてこの行事に参加している。

学生たちは、当日の朝に大井沢に集まり、山形大学の学生とともに会場準備の作業等を行った。午前中は、町長による講話の後に、保健師による健康体操の指導があった。学生たちは、この期間、昼食会の準備等を行った。昼食会では、学生たちは食事の提供の作業などをしながら、各テーブルにわかれて高齢者と交流した。事前の打ち合わせで、大井沢の昔の暮らしの聞き取りを行うことになっていたこともあり、学生たちは山村部での昭和初期～中期の話を開

き、現在（や都市部）との違いに驚いていたようであった。

昼食会の後半はレクリエーションの時間となり、地区の子どもによる花笠踊りの披露などがあった。本学学生（及び教員）も山形大学の学生（及び教員）とともに、「上を向いて歩こう」の合唱を行い、高齢者から喜ばれていた。

敬老会は午後2時頃までに終了した。その後、学生たちは直会（なおい）に招かれ、地区住民との交流を深めた。学生のうち2名は既に大井沢に何度も足を運んできていたこともあり、地区住民にも覚えられており、また、学生も地区についての状況、とくに山村地域の生活や地域づくりについて理解を深めているようであった。



図12 大井沢敬老会の様子（筆者撮影）

(6) 大井沢お～たむふえあへの参加

大井沢お～たむふえあは、かつて開催されていた「大井沢きのご祭り」の規模を拡大し、大井沢の他の特産物なども販売するとともに各手工芸品の販売・体験等も行うようになったもので、現在の形式になって今年で6回目のイベントである。かつては、「大井沢雪まつり」（平成元年～21年）が大井沢最大のイベントであったが、これは、担い手の高齢化等により運営が困難になって21回で終了となった。その後、この雪まつりに変わるイベントが区内で検討され続け、大井沢の生活や文化、特産品をまるごと楽しめるものであり、かつ、持続可能な形のイベントとして企画されたのが、この大井沢お～たむふえあであり、現在では、大井沢で最大のイベントとなっている。2016（平成28）年度は、大井沢自然と匠の伝承館・大井沢自然博物館を会場に、10月16日（日）に開催された。



図13 大井沢お～たむふえあの様子（筆者撮影）

このイベントに、本学学生6名（及び教員1名）が参加した。また、この行事についても山形駅以降の諸経費については「都市部学生等との協働による大井沢の地域づくり事業」から補助を受けている。また、学生のうち1名は大井沢区への学外実習・インターンの一環としてこの行事に参加している。

学生たちは、前日土曜日の昼過ぎに大井沢に集合し、事前の会場設営の作業から参加した。今回も、山形大学の学生（及び教員）も参加しており、地元住民、山形大学学生と共同でテントの設営や机や椅子の移動、会場の清掃等の作業にあたった。作業は夕方までに終わり、16時からは旧大井沢小学校において「地域づくり懇親会」が行われた。地域づくり懇親会では、山形大学の山本匡毅准教授から「山形大学人文学部の大井沢地区におけるフィールドワークの成果と展開」と題した講演が行われ、その後に食事も兼ねた懇親会が開催され、運営に関わる地区住民、学生との交流が深められるとともに、翌日の担当や配置等の確認が行われた。

お祭り当日は、本学の学生たちは地区住民や山形大学学生とともに出店の手伝いや、誘導や案内等にあたった。今年度は天候にも恵まれ、快晴の穏やかな天気の中、地区内外から多くの人々がお祭りに集っていた。会場内では、地元のミュージシャンによる演奏なども行われ、お祭りを盛り上げていた。また、学生たちは、地元の人々と出店の運営をするなかで、地域の特産品について、その特性がどのように語られ、どのように販売されていくのかを学んでいるようであった。

(7) 大井沢の未来を描く会への参加

大井沢の未来を描く会は、大井沢の地域づくりを考え提案・実践する、区有志の集まりであり、毎年、秋から冬にかけて月1～2回程度の勉強会が開催しているものである。また、春に開催される「大井沢地域づくりフォーラム」で、毎年、次年度以降の大井沢の地域づくりの指針として、その成果が報告されている。

2016（平成28）年度は、11月29日（火）、12月13日（火）に開催されたほか、1月8日（日）、2月7日（火）、2月28日（火）に開催が予定されており、その成果が3月5日（日）の大井沢地域づくりフォーラムにて報告される予定となっている。また、未来を描く会の主催で、12月10日（土）から11日（日）にかけて新潟県上越市を訪れ、廃校の活用等について視察を行っている。

この会の活動の一環である、大井沢への移住促進のポスターの制作、移住者向けの案内冊子の作成に本学学生が関わっているほか、新潟県上越市の視察に本学学生が1名参加している。

ポスター及び冊子の制作については、現時点では未来を描く会の会合に学生が直接参加しているわけではないものの、3名の学生が制作に協力をしている。未来を描く会には、本学から教員1名が参加しており、教員経由で打ち合わされた内容が伝達され、それをもとに現在、ポスターと冊子の制作が進められている。また、年明けの連休及び春季休業期間に行われる未来を描く会には、本学学生も参加を予定している。

新潟県上越市の視察については、基礎ゼミの学外実習・インターンシップの一環として学生が1名参加した。大井沢の視察参加者は車で上越市へ移動したが、本学学生は新幹線で移動し、上越市内でその車にピックアップされ、その後、視察に同行するという形をとった。また、視察では、宿泊体験交流施設「月影の里」をはじめとして市内の各所の施設を見学し、大井沢に近い条件である豪雪地帯の山村において、廃校を活かした地域づくりがどのように行われているのかについて知見を得た。

5. 今年度の今後の活動

2016（平成28）年度中も、引き続き冬季に行われる各種活動に学生（及び教員）の参加が予定されている。

(1) 大井沢の未来を描く会・大井沢雪ん子祭り・大井沢地域づくりフォーラムへの参加

上記のとおり、引き続き大井沢の未来を描く会の行うポスター及び冊子の制作に学生（及び教員）が協力をする予定である。また、1月以降の「大井沢の未来を描く会」には、学生も参加し、ポスター及び冊子の制作について、地元住民と具体的に打合せを行う予定である。また、1月8日（日）の大井沢の未来を描く会の翌日、1月9日（祝）には大井沢雪ん子祭りという、大井沢自然と匠の伝承館内で行われる新年のお祭りが予定されており、前日の未来を描く会に参加した学生は、そのまま雪ん子祭りの手伝いも行う予定である。また、現在のところ、この会合には、学生9名（及び教員1名）が参加予定であり、この行事についても山形駅以降の諸経費については「都市部学生等との協働による大井沢の地域づくり事業」から補助を受ける予定となっている。

また、2月7日（火）および2月28日（火）の大井沢の未来を描く会、3月5日（日）の大井沢地域づくりフォーラムについては、現時点で3名の本学学生（と教員1名）が参加の予定であり、5日（日）のフォーラムでは、何等かの形で成果物についての発表を行う予定である。

(2) 志津雪旅籠の灯りへの参加

昨年度に引き続き、2016（平成28）年度も志津雪旅籠の灯りに本学学生（及び教員）が参加を予定している。今年度の制作は2月21日（火）から開始が予定されており、本学学生は2月20日（月）の午後に山形駅に集合し、当日の夕方までに現地入りをし、21日からの作業に従事する予定である。また、雪旅籠の灯りそのものは、2月24日（金）からの開催が予定されている。また、現時点で、このイベントに学生13名（及び教員1名）が参加の予定である。

6. 今後の連携について

2016年度の現時点までの活動を振り返ると、未だ、現地でのイベントへの当日参加や手伝いが中心であり、その企画

段階・準備段階から学生が関わる機会が少ない。担当教員（筆者）は、秋祭り等にも企画段階の会議から参加し、そのなかで日常的にその運営方法や開催形態等にも意見を述べ、地域づくりの核心部分にも関わっているが、現段階では、学生がそこまで関わるに至ってはいない。

観光デザインを学ぶにしてもコミュニティデザインを学ぶにしても、当日の参加や手伝いは、導入として地域の実情を肌で感じ、地域の人々との交流を深めるといふ点では意義が深いものであり必要なことではあるが、それだけで十分なものではない。

学部設立3年目となる次年度は、専門的な知見をより深めるべき3年次の学生も登場することから、今後は、西川町内の地域の活動の企画や準備段階からどれだけ関わり、観光やコミュニティについて、そのデザインを行う段階から関わられるようになるかが重要なところとなってくる。

2016（平成28）年度、現在（平成28年12月現在）進行中の大井沢の未来を描く会での活動などは、その第一歩になると考えられるが、今後、専門ゼミを中心とした学生主導の地域づくり活動の企画提案や実施がどれだけできるかが課題になる。また、2017（平成29）年度には、社会調査士課程科目である「社会調査実習Ⅰ・Ⅱ」も一部、大井沢で調査を予定しており、これも大井沢で現在必要と考えられる調査内容と、社会調査士育成上必要な調査実習の内容と接合しながら行うことで、教育上も実践上も有益なものにしていく必要がある。

そう考えると、既に多くの活動が西川町内で行われているものの、これが本学本学部の教育にどう貢献するのか、また、その活動が地域にどのように貢献するのかは、これからの活動にかかっていると見えるだろう。

注

- (1) 西川町2016『西川町町勢要覧2016 資料編』参照。なお、平成28年12月1日現在の人口についてのみ、西川町ホームページ参照 (<http://www.town.nishikawa.yamagata.jp/index.html>)。
- (2) 大井沢は、農林水産省が主催する「農林水産祭」の「むらづくり部門」において、2002（平成14）年度に天皇杯を受賞している。また、101世帯のうち16世帯がIターン者世帯と、外からの移住者が多く集まっている地域でもある。
- (3) 前任校在職時の地域活動については、拙著「地域調査実習・地域活動の現代的課題としての地域貢献・実学教育との接合」（土居洋平、2015）を参照。

文献

土居洋平 2015「地域調査実習・地域活動の現代的課題としての地域貢献・実学教育との接合」『村落社会研究ジャーナル』日本村落研究会、pp.34-44

西川町 2016『西川町政要覧2016 資料編』西川町

『山形新聞』2015年12月23日「まちづくりで連携 西川町 跡見学園女子大と提携」

『山形新聞』2016年8月5日「連携協定の跡見学園女子大（東京） 学生2人インターンシップ イベント手伝い、旅館で接客」